

# 質的研究における客観性に関する論考

## — GTA法と写真表現との比較を素材に

松原弘子 (大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター)

### はじめに

本稿では、質的研究の方法論の一つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) と写真表現の対比から、研究と表現の差異を考察する。

本稿でいう質的研究とは、言語や文字など、数量として測定できないデータを何らかの方法で分析して結論を導き出した研究を意味し、インタビューやフィールドワークで得たデータ (資料) を用いた研究が含まれている。

人文社会科学研究においてはフィールドワークやインタビューは調査方法であり、その手法が研究的でないと批判されることはないだろう。しかし保健医療学研究では、質的研究、特にフィールドワークを用いた論文などは主観的で研究の厳密性に欠けるという評価が存在する。この領域は実験科学や医学、疫学から発展しており、誰が研究しても同じ方法を用いれば同じ結果が得られることが信用される研究の条件と考える傾向がある。よってフィールドワークのような、研究者が変われば記録 (結果) が変わる研究は研究とは呼べないと、乱暴に結論付けてしまう人がいるのである。

この認識差は研究が擁する文化の違いであり、保健医療と人文科学が別領域であった時代には問題にされなかった。ところが近年、保健医療を社会学的な視点から研究した論文が増えたため、このような批判が生まれてきたのである。

本稿は、このような背景をふまえて保健医療学研究における質的研究批判を他領域の研究者に紹介するとともに、まったく異なる文化によって立つ研究者が、相互に対等かつ建設的に議論するためには、研究に対するどのような認識共有が必要かを、写真表現と質的研究を例にとりながら考えようとする試みである。

### 保健医療学研究における 質的研究の評価

保健医療分野の、質的研究法を用いた論文の評価は不安定である。このような研究は主観的で研究とは呼べない、という批判がある一方で、当事者研究やケア研究においては、この方法が採用されることが増えてきている。

たとえば、精神障害者が知覚する世界を理解しようと病棟で精緻な観察 (フィールドワーク) を行ったり、高齢者が介護施設の生活に適応するプロセスをインタビューで明らかにしたりすれば、計測された数値データに基づく調査ではわからない現象をとらえることができる。このような研究により、より当事者本位の保健医療サービスが提供できるようになると考える研究者が増えてきたのである。

しかしこのような研究は人々の意識や主観、認識をとらえる意図からデータ (記録) がとられるため、研究者の主観がデータに反映されていることがみえやすい。したがって、誰でも同じデータが取れることが結果の客観性の根拠であり、対象を変えても同じ結果が得られることが研究の普遍性を示すと考えている人々 (本稿でいう研究客観主義者) には、少数者を対象にし、かつ研究者により変化するデータは、普遍性がなく、データは主観的で信用できないと感じられるのである。

実際には、機械や人の手で計測されたデータにおいても、なぜそれを測るのか、というデータ聴取の判断には研究者の意図 (主観) が反映されており、どこを、どのように計るのかによっても差が生じている。しかしこれらの結果は数字で表されており、計測方法が論文に書かれているため、誰がとっても同じ数値が得られるはずと信じやすいのである。しかし質を記述

したデータは研究者が書いた文章を結果として用いていることがあるため、研究者が主観を持っていることがわかりやすい。さらに、研究者の技量によってデータの質、すなわち、対象がありありと捉えられているかどうかには差が出る。質的研究の結果が研究者により異なるのは、結果に、研究者の見方（主観）と記述力（技術）の差の両方が含まれているためである。

しかし、質的研究を批判する研究客観主義者は、研究結果に差異が生じるのは結果に主観が含まれているからだという意味づけていることが多い。この誤解が、質的研究批判を研究の客観性論争に発展させ、議論の決着をつかなくさせるのである。

## 質的研究が捉えようとしている質とは何か

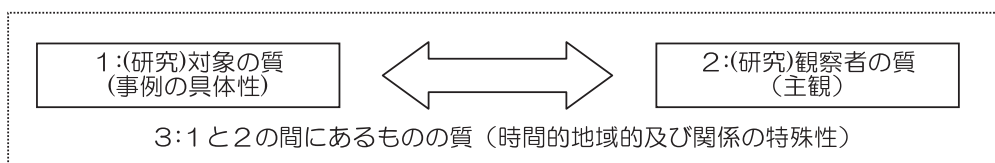
このような論争は、対象の質を捉えるためには研究者の視点、すなわち主観が必要という基本的な事柄が十分理解されていないために起こる。そもそも質的研究法が生まれた背景には、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結び付けて理解しようとする（トゥールミン、フリック『質的研究入門』春秋社、2002、p.19）」社会学研究の流れがある。トゥールミンが方向づけた流れに基づき、フリックは質的研究を、「人々自身の表現や行為（当時者性・主観性を通して）」「具体的な事例（計測された抽象的な数ではなく）」「時間的、地域的な特殊性（普遍・一般化すると削ぎ落とされてしまう条件に注目）」「生きた文脈（歴史や文化）の中に置いて検討」する研究としている（同上、p.3）。

研究対象を生きた文脈の中でとらえるには、この文脈の中に対象も研究者もともに含まれている、という状況認識が必要である。質的研究が扱う質には、図1のように階層の異なる4つの質が含まれている。これらそれぞれの質、あるいはこれらの質の相互性に注目し、その質を明らかにしようとするのが、質的研究だからである。

保健医療の研究においては従来、対象の普遍性をとらえるためには、その対象に影響を与えている個別の条件をできるだけ切り捨て、単純化した要素の比較から普遍性や一般性をとらえることが重要と考えられてきた。そして、対象の把握に影響を与えている研究者の主観はないものとみなし、保健医療学の訓練を受けた人間なら誰がデータをとっても同じ結果が得られることが、研究の客観性を保証すると信じられてきた。そのデータは保健医療学の価値観に基づいて聴取されており、異なる領域の研究者なら別の結果を得るかもしれない、という、研究者の主観を相対化するような問いは、長く立てられてこなかったのである。

この傾向に対し、誰もが自身の主観から離れることができないという事実に依拠して、主観の内側から世界をとらえ、現象に新しい解釈を与えようと試みるのが、この分野の質的研究である。この研究では、従来切り捨てられてきた、「ある（特有の）現象が発生するための複雑な条件（質）」を丁寧にあぶりだそうとする。図1をもとに説明すれば、質的研究は、とらえられた質がどの視点から見たものか、すなわち研究者の主観を明らかにして、結果を相対化することで、対象が存在する立体的な世界（生きた文脈）の存在をとらえようとする。したがって質的研究では、研究者の主観を明確にすることがまず前提にある。仮にこの主観を客観主義に基

図1：質的研究によって明らかにしようとする質とは何か



4:1と2と3が存在する歴史の質（生きた文脈）

（筆者作成）

づいて不問に付そうとすれば、かえって研究結果（および結果の解釈）の信頼性に揺らぎを生じさせかねない。

## Grounded Theory Approach(GTA)とは

しかし保健医療研究で主観性を前面に出せば、研究自体が胡散臭くとられてしまう。それを避ける方法として比較的よく用いられているのが、データ対話型理論（Grounded Theory）に基づいたGrounded Theory Approach（GTA）である。

GTAは、社会学者であるグレイザーとストラウスが1960年代に開発した研究理論および方法で、当時の社会学研究の分野で主流であったGrand Theory（大理論：社会全体をカバーする大きな物語を理論として設定し、その物語に沿うデータを集めて論理を裏付けようとする）に対抗して登場した（B・G・グレイザー、A・L・ストラウス『データ対話型理論の発見』新曜社、1996、p.369）。

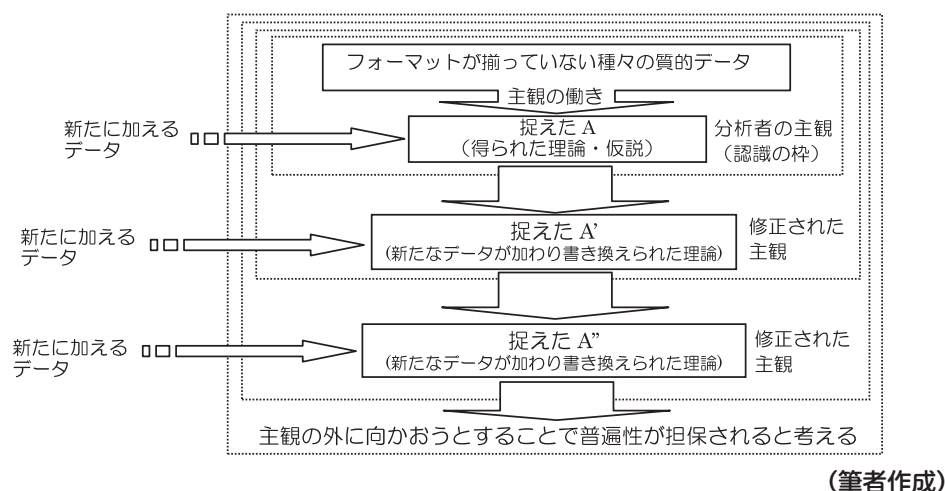
GTAの方法論とは次のようなものである。まず、集めた質的データを何らかの方法でテキストに変換する。この場合の質的データとは数値に変換できないデータを意味し、具体的には記録された文字や音声、写真などを指す。次に、テキストに含まれた意味の切片を切り出す。この作業をコーディング（コード化）と呼ぶ。そ

して、切り出されたコードを数段階のステップでカテゴリー化し（概念カテゴリーの生成）、さらに数段階のステップで上位概念を生成、理論（仮説）を導き出す。さらにこの生成された理論に、新たなデータを加えてコード化・カテゴリー化し、以前の理論に組み込んで修正することで、観察者の主観（や調査の元になった推論＝仮説）が排除されて、ある普遍性を持った理論が浮き上がってくる（図2）。

この方法によれば、均質なデータ収集（サンプリング）による量的な分析が困難な対象であっても研究素材にすることができ、質の異なる多様な集団（得られるデータの質も異なる）の比較検討も可能となる。そして、データに徹底的に依拠しながら理論を洗練させていくことで、論理的に対象を見る訓練を受けた研究者が陥りがちな、自分の持っている論理（認識）の枠組みの中からデータを理解しようとする思考パターンを逃れて、現実を捉えた理論を生成することも可能となる。

コード化・カテゴリー化には研究者の主観が含まれるが、生成された仮説に新たなデータを加えて理論の修正を繰り返せば普遍化の程度は高まり、新しく生成された仮説の客観性が担保される。GTAは質的研究法ではあるが、対象の事例性よりも普遍性に注目しており、客観性の担保にこだわりを持っている（理論は常に主観の外に出ようとしている）。日本の保健医療分野の質的研究者にGTAが広く受け入れられてい

図2：GTAによる理論（仮説）生成のプロセス



る理由は、この手法が、質を捉えようとしながらも、基本的には客観主義に基づいているため、研究手法としての説明が理解されやすいためであろう。

## 写真の記録性と表現との関係

研究である以上は結果の普遍性を希求すべきであり、何らかの方法を用いて客観性が担保されるよう試みているかどうかは研究の最低条件である、という考え方を否定はしないが、研究と研究ではない文章を分けるのは、得られた結果、ないし方法が客観性（この客観性とは研究者が自身の主観を排除しようとしていることを指す）を担保しているからなのだろうか。この問題を、写真表現との比較から考えてみたい。

写真は、光の屈折をレンズでコントロールし、その多寡をフィルム表面の粒子の凝集（ばらつき）に反映させて定着させて得た画像である。コピーを重ねても変質・劣化しにくく、機材の条件を満たしてさえいれば、撮影者の技量に差があっても「その場の再現であると疑いなく思える程度に」精緻な画像が得られるため、「客観的事実」や「実体」を忠実に写し取る記録媒体であると広く信じられてきた。

「写真は世界中どこでも理解される唯一の『言語』であり、あらゆる国家と文化のかけ橋となって人類を結びつける。写真は政治の影響を受けず一人間が自由なところでは一人生や出来事を忠実に映し、他人の希望や絶望に仲間入りすることを許し、政治的、社会的状況を浮き彫りにする。そしてわれわれは、人類の人間性、非人間性の目撃者となる（雑誌『クリエイティブ・フォトグラフィー』1962年、スーザン・ソントグ『写真論』晶文社、1979、p.195-196）」。写真史家ヘルムート・ゲルンシャイムの言葉に象徴される、写真の記録性に対するゆるぎない信頼感は、デジタルデータとしての記録、保存法が普及し、画像加工も容易になった現在は、急速に変わりつつある。しかし、得られた画像のリアリティ、いいかえれば「本当らしさ」が高いために、写し取られたこと（もの）は実際に起こった（存在した）と信じやすい状況は変わっていない（写真の客観性に対する疑義の議論は以下を参照。スーザン・ソントグ『他者の苦痛

へのまなざし』みすず書房、2003、p.27）。

しかしこの、客観的信頼性の高い視覚データを得られる記録媒体であるという写真の特徴は、写真を、他の手法による表現、例えば絵画や彫刻などよりも、芸術としては一段低い地位に置く原因ともなってきた。この写真は単なる記録であるという言説（論理）に対抗し、写真家は、写真表現の可能性を追求した様々な作品を発表（開発）してきた。記録がなぜ芸術と言えるのかという写真表現をめぐる論争と、主観的な質の表現がなぜ研究と言えるのかという質的研究をめぐる論争は、全く逆の、しかしよく似た論点をめぐって展開されてきたのである。

## 理論化で失われる対象の質とは何か — 写真表現の比較をもとに検討する

質的研究における対象の質をとらえることとその質を普遍化すること、および客観性との関係は、写真表現と対比的に考えてみるとわかりやすい。

写真1は「Our Face」という組写真の1枚で、「京都宮川町、春の「京おどり」を舞う芸妓さん、舞妓さん30人を重ねた肖像」とタイトルされている。作家は、30人の芸妓さんと舞妓さんという個別の質（個性）を持った対象を重ね、「京おどりの踊り手」の普遍性を抽象化（理論化）した。抽象度が上がるにつれて、個性が高い着物の柄やしぐさなどの差異は消え、平均化された30人の舞妓さんの顔が浮立つ。この作品は、数も質も異なる人々を様々に撮り重ねた写真を並べており、対象の数が増え多様になるにつれて、イメージの重なりが少なくなって質感が失われ、対象が平均化・均質化されていくとともに、写真がとらえた集団間の差異も少なくなることが示されている。

写真1をGTAになぞらえると、GTAによる理論化の手法が直感的に理解できる。GTAでは、これ以上新しいデータを加えても生成された理論に変化が生じない状態になったことを理論的飽和と呼び、得られた理論（仮説）が成立したと考える。30人の舞妓さんを重ねようが100人の舞妓さんを重ねようが同じ画像が得られるなら、その画像は理論的飽和に達したのである。



では仮に、100人の舞妓を重ね合わせた写真と、100人の舞妓以外の踊り手を重ね合わせた写真に特筆すべき差異が見いだせなかったとしたら、その写真は抽象化された舞妓の像（理論）と言えるだろうか。

実は、質的研究法としてみた時のGTAの扱いにくさは、理論の客観性の確保にこだわりすぎると、本来捉えるつもりだった現象の質を見失い、そこから得られた理論が意味のないものになってしまうところにある。GTAの解説書では、コードの切り出し（コーディング）やカテゴリー化などの抽象化のプロセス、すなわち、研究のテクニックが難しいと理解されていることが多いが、GTAの難しさは抽象化のテクニックより、研究的に意味があり、かつ普遍的な論理が取り出せた時に重ね合わせを止める、理論的飽和が得られたと判断できるかどうかにある。客観性にとらわれて理論化を重ねすぎると、目的としていた質、すなわち舞妓という像をとり逃すのである。

写真表現では、対象の質感描写が優れていることは評価される写真の条件の1つであり、多様な大勢の人を重ねて個別の質感を排除した写真1は、従来の写真表現の評価ないし既存の価値へのアンチテーゼとなっている。しかしこの作品は、対象の選び方、重ね合わせの方法、写真の処理技術などによって、一人ひとりの細かな質感を切り捨てながらも、集合としての人々の質感（存在感）を浮かび上がらせることに成

功している。この作品の評価が高いのは、細部の描写を排除しながら、写真であるという特徴は壊していないため、対象をただ写し取るだけではない写真芸術の可能性を示しているからであろう。

写真1のシリーズは、被写体がわかりやすい写真も、写真説明（キャプション）がなければわからない写真も含んでいるが、写真とキャプションの組み合わせにより、1点1点の写真が比較可能になっている。しかし全体としては、多様な人々の存在感という結果（理論・表現）を表現しており、画像の重ね合わせを止める、すなわち理論的飽和に対する作家の判断が的確であることによって、写真表現の芸術性が担保されている。

このような作家（研究者）の判断力が機能するためには、表現（研究）しようとする主体（作家・研究者）が、自身がとらえようとしている質が何かを明確に意識する必要がある。これは主観に他ならない。もし主体が主観に無自覚なら、質を把握しようと選択した研究方法（表現法）で質を取り逃すという残念な結果が生じることになる。

## 主観に依拠することでなぜ普遍性が担保されるのか

次に写真2を例に、主観と普遍性の関係を考えてみる。この作品では作者はまず、私に相對



写真1：Our Face ©北野謙



写真2：彼女と私 ©中村紋子

する彼女の表情を様々に切り取り（撮影し）、次にそれらの写真から口元だけを切り出して、1枚の写真に焼き付けている。唇と歯並びと舌という部分からなる様々な表情を並べることで、鑑賞者に対象である彼女の表情を想像させ、その想像力を媒介に、彼女と私の関係を伝えることを意図した作品である。1枚の中に多様な瞬間を並べて関係性と時間を凝縮し、口元だけを取り出すことで、表情の変化を強調している。顔の写真を並べれば、顔が持つ情報量の多さから、普遍性よりも彼女と私の個別の関係性が強調されてしまう。しかし、口元を取り出すという抽象化を加えたことで、私と彼女という個別の関係性に限らない、親しい人間関係が持つ普遍性、たとえば、口の動きのエロティシズムや親しさが醸す安心感、おかしみなどが浮き立ってくる。作家が画像情報を選択して抽象度を上げたことで、鑑賞者が驚きやおもしろさなどを感じる幅、いわゆる作品解釈の多様性が広がったのである。

この作品の要は、切り出された口元のありありとした質感（表情）である。彼女の表情をとらえた最初のスナップ写真が質—この質は写真家の撮影技術に担保されている—を満たしていなければ、鑑賞者が、切り出された口元の表情から顔全体や関係性の変化を想像することはできない。この作品は、鑑賞者の想像力を媒介に、作者と鑑賞者が対話することで成立する。我々、すなわち作家と鑑賞者の間には、人の顔や表情の変化についての共通認識がある。ある関係（彼女と私）を見せられることで、他の関係（例えば鑑賞者と鑑賞者の友人）との共通性、すなわち普遍性が理解できるのである。

写真1、2はいずれも写真表現であるが、対象の質に注目し、そこから何らかの普遍性を取り出しているという点では、質的研究と同じである。写真1と2は、とらえようとしている対象の質の階層が異なり、写真1は図1の階層4、対象が属する世界全体の抽象化を試みており、写真2がとらえようとしているのは階層3の、対象と撮影者の関係性である。表現したい対象の質に合わせて、写真1の作家は舞妓さんの個性という質感を排除し、写真2の作家は、情報量が多すぎ普遍化の邪魔になる目鼻立ちを排除した。これらの取捨選択の判断は、作家がとらえ

たかった対象の質、すなわち目的に合わせて、作者の主観に基づいて行われている。

この二つの作品を芸術として成立させているのは、制作目的に対する作家の判断力の確かさである。撮影技術の確かさは、判断を活かす手段に過ぎない。確かな主観的判断によって制作された作品は、鑑賞者と共有できる普遍性を備えている。

芸術表現においては、主観性と普遍性は相反しない条件なのである。

## 研究結果の客観性をめぐる誤解

質的研究と写真芸術とは、対象の質をとらえ、何らかの抽象化や普遍化を試みることで対象の理解を広げようとする点で共通している。しかし一方は研究と呼ばれ、一方は芸術と呼ばれる。そして前者は表現との区別がつかないと批判されており、後者は記録との区別がつかないと批判されてきた。これら2つの批判の特徴を手がかりに、研究と表現をわけるものが何かについて考察する。

質的研究は主観的な表現と区別できないため研究ではないという批判の誤解は、誰が捉えても同じ結果が得られるという結果の再現可能性と、その結果に客観性があることを同一視していることと、主観に基づき対象にアプローチしたからといって、結果の再現可能性が失われているとは限らないということが理解されていないために生じる。

前者の誤解は、客観性を持つと信じられている写真という記録媒体が、実は撮影者の主観によって切り取られており、ある恣意性を持っているということを考えれば理解しやすい。同じ場所で同じ技術を持った撮影者による2枚の写真が非常に違っていることはよくある。しかし通常は両方の見方が客観的事実とみなされる。これは、このような見方が可能という提示に対し、写真を見る側が、「ありそうなこと」として了解するからである。

客観性とは事実の有無ではなく、呈示された結果が、ありそうなこととして了解されるような性質を持っていることを指す言葉なのである。この性質をここでは「本当らしさ」と表現する。研究であれ表現であれ、その中に「本当

らしさ」が全く見出せないのであれば、「独りよがり」と言われる。主観的であることと独りよがりであることは異なる。独りよがりとは、作者（研究者または作家）の主観によって表現されたものが「本当らしさ」を持たないため、誰とも理解が共有できない状態を指す言葉である。

保健医療分野の質的研究論文ではしばしば、哲学における現象学的説明を冒頭に置き、結果の解釈に対する批判を防衛しようとする論文作法がみられる。しかしこのように主観の相対化を試みた時点で、相手がよりどころとする客観主義にからめとられてしまう。その結果、客観的という言葉の意味を十分検討しないまま、質的研究が必要だと考えている研究者と、研究客観主義者の間の対話の可能性が封じられる。

質的研究を進めたい人々が、人々により良い保健医療サービスを提供するためには、他領域の視点を活かした研究を進める必要があると考え、研究客観主義が見過ごしてきた対象の質をとらえることで、保健医療の向上に役立てようとするこの研究法を採用しているのであれば、このような帰結は本末転倒と言えよう。

## 研究と表現とを分けるもの

実験科学系の研究者と社会科学系の研究者が協力して、より良い保健医療研究の実現のために議論したいなら、異なる研究認識を持つ領域双方に了解可能な研究の定義を定める必要がある。ある操作の結果生み出された制作物が、研究なのか、表現なのかを見分ける特徴が客観性でないなら、何によって両者を分ければよいのであろうか。

一つの考え方に、何らかの発見により感情や感覚が反応して対話可能となる（感動する）ものを芸術作品と呼び、理解や思考が反応して対話可能となる（納得する）ものが研究と呼ばれるという分かりやすい分類基準がある。しかし、写真芸術では、それが写真であるという理性的な判断と、それにより感動するという感情的な反応が成立している。また質的研究においては、対象の質がありありととらえられているかという感情的な反応と、その分析が論理的なものであるかという理性的な判断の2点が成立してい

る。したがって前述の基準では、研究と表現とは分けられないことになる。

しかし、制作物が表現なら、作品に込められた作者の主張は、単独で完結したものとして提示されているため、鑑賞者の自由な主観によって、作家の意図とは異なる解釈で作品を読み解いて構わない。仮に作家が鑑賞者の自由な解釈を制限したいなら、作品を発表する際に、作者の意図した解釈方法を説明として添付すればよい。これが写真につけられる「キャプション」という説明文である。作家は次々と作品を発表するため、その中には作品の連続性が見出されるが、作品それぞれはあくまでも単独のものとして鑑賞され、その鑑賞方法（解釈）も自由である。

一方、制作物が研究ならば、その制作物（論文）は多様な批判や議論にさらされながら、繰り返し書き換えられる余地を持っていなければならない。表現としての制作物（作品）は、多様な鑑賞に堪えられること、すなわち自由な解釈が許されることに意味があるが、研究としての制作物（論文）は、多様な批判や議論にさらされて書き換えられ続けることに堪えられることで意味を持つ。

したがって質的研究と芸術やその他の表現とを分ける条件は、研究結果が多様に解釈される中で、それらの解釈を批判的に再検討し、新しい研究結果を積みあげていけるかどうか、すなわち、結果の書き換え可能性が担保されているかどうかにあると考えることができる。

## 研究の客観性について再考する

質的研究と写真表現はどちらも、対象を吟味、検討し、どのように捉えればより「自分が見たように（主観的に）」表現できるかを考え、対象から画像なりテキストなりのデータを得て、他者からの評価が可能なものに仕上げる行為である。そして制作物が成立する条件はどちらも、主観に基づいた描写、対話可能性あるいは「本当らしさ」があるか、結果に公共性があるかの3つである。

この3番目の、結果の公共性の質が、表現と研究では異なる。表現では、作品の公共性は、自由で多様な解釈が可能な点にある。多様な解



積、評価が可能な故に、現時点では評価不能なものであっても、保存され、将来の再評価を待つことも珍しくない。一方研究では、結果が多くの人批判に基づく書き換えにより、洗練され、あるいは利用価値が高まり、あるいは新たな広がりを獲得していけるかどうかによって公共性が担保される。そのため研究においては、現時点での結果に何らかの有用性が見出されるかどうか公共性の評価となる。有用性が見出されない研究は、再検討や書き換えのための議論を生み出さないからである。

したがって、研究が批判も議論も許さない結果の絶対性を主張していれば、「研究ではなく表現」と棄却されるのは仕方がないが、その結果が評価できないとする理由が対話可能性の不在（独りよがり）にあるなら、それは研究の質が低いだけのことであり、研究でなく表現であり受け入れられないと断じるのは筋違いである（表現者に対しても失礼である）。このような場合は、他にどのような結果が得られる可能性があるかを検討し、より普遍的な、すなわち、他の研究者の主観と共有可能な別の結果を得ようとする努力を求めるのが、研究に対して開かれた態度であろう。

対象がありありと写し取られているかどうかは、客観性ではなく「本当らしさ」という言葉を用いるのが適切である。ありありとした描写を可能にするのは主観である。写真1と写真2のアプローチは異なるが、どちらも、対象の「本当らしさ」を保持しながら、制作者の見方（主観）から、ある抽象化が行われ、制作物の評価可能性、すなわち芸術作品としての公共性が認められている。したがって写真芸術と呼べるのである。

## おわりに

写真が客観的であると盲信することで、その対象には別の見方が存在するという客観的な事実が見失われることと、保健医療学領域の質的研究が、研究結果の客観性、普遍性を担保しようとはがくことで、その研究で描き出そうとしていた対象の質を見失ってしまうことは似ている。どちらも、目的に照らして不正確な（不適合な）結果をもたらし、その手法の持つ可能性

を閉ざしてしまう。質的研究法を用いているというだけで、客観性に欠け研究の価値が低いと決めつける批判が、このようなあがきを生じさせているなら、この傾向は再考されるべきである。

研究結果が客観的な批判に耐えうるものかどうかを検証することは重要だが、研究の価値を誤解した客観性に基づいて判断してしまうと、常に新たな知見（可能性）を求めようとする研究者の好奇心にしたがって、従来とは異なる手続きを取った研究をすべて排除してしまいかねない。本稿の写真はともに、清里フォトアートミュージアム（K-Mopa）が主催する、ヤング・ポートフォリオ2003の入賞者のものである。この写真展は、記録媒体として一段低く見られている写真表現を目指す若手が、最初に「作家として認められる」場を提供することを開催趣旨としており、入賞者の作品は美術館に買い上げられ、芸術作品として保存される。この美術館の、新しいことに挑戦する才能を発掘しようとする姿勢を、保健医療研究者はもっと見習うべきであろう。

質的研究は、質をとらえるための技法の獲得に慣れやセンスが必要であり、誰でもが質の高い成果を発表できるわけではない。この研究法の特性を十分活かし切れていない研究がまま見られるのも事実である。しかしそれをもって、この研究法は不安定で価値がないと棄却することは、この領域の研究の発展を狭めるとともに、他領域との対話可能性も封じてしまう。質的研究をめぐる論争に参加し、批判を展開する際には、この点を自覚して臨むべきである。